

## 2025 年度 グローバルラーニングセンター FD 活動報告書

2025 年度のグローバルラーニングセンターの FD 活動では、全学の FD 方針に基づき、以下の取り組みを中心に実施した。

### 1. 「日本語コース開発」のための FD

#### (1) 活動内容と成果

2025 年度より日本語科目が選択科目となった。また、2025 年度 9 月からは中日双語入試が始まり、日本語能力が入門・初級レベルの留学生が大幅に増加している。こうした状況の変化に対応するため、GLC 日本語セクション教員が中心となり、「日本語コース開発」に関する FD を実施した。活動の目的は、2025 年度の日本語コース実施状況と履修状況を分析し、2026 年度に向けてレベル別日本語コースを開発することである。具体的な活動内容とスケジュールは以下の通りである。

	活動内容
4 月	<ul style="list-style-type: none"><li>・計画立案</li><li>・目的の共有と実施方法の検討</li></ul>
5 月～8 月	<ul style="list-style-type: none"><li>・2025 年度前期日本語科目実施状況および履修状況の分析</li><li>・入門レベルのコース開発（後期からの運用に向けた準備）</li><li>・レベル別日本語コース開発（カリキュラム全体像）</li><li>・日本語科目履修者へのヒアリング</li></ul>
9 月～12 月	<ul style="list-style-type: none"><li>・2025 年度後期日本語科目実施状況および履修状況の分析</li><li>・入門レベルのコース試行</li><li>・レベル別日本語コース開発（カリキュラム全体像、各レベルのシラバス案、科目運営方法等）</li></ul>
1 月～	<ul style="list-style-type: none"><li>・2026 年度カリキュラムへの実装（シラバス・ルーブリック作成、テスト開発、教材開発）</li><li>・ガイダンス資料の作成</li></ul>

成果としては、以下の2点があげられる。まず、2025年度後期に「日本語入門」履修者に対する正課外科目を開発できたことである。次に、2026年度からのレベル別日本語コース全体像の策定できたことである。レベル別日本語コースの全体像として、【総合科目】【技能別科目】【資格対策科目】【目的別科目】の4種類が策定された。この内、【総合科目】と【技能別科目】には、入門・初級Ⅰ・初級Ⅱ・中級Ⅰ・中級Ⅱ・中級Ⅲ・中級Ⅳ・上級の8レベルに対応した科目を設定した。

## (2) 評価

「日本語入門」履修者に対する正課外科目を2025年度後期からスピード感をもって開発・運用できたことは高く評価できる。その成果によって、日本語能力が入門・初級レベルの学生層に対する日本語学修初期段階での学習機会の提供につながった。また、レベル別日本語コース全体像の策定に関する成果は、2026年度の日本語カリキュラムに直結するもので、高く評価できる。

## 2. 「語学授業 105 分対応」のための FD

### (1) 活動内容と成果

山梨学院大学では、2025年度より科目の授業時間が90分から105分へと移行した。GLC105分対応FDワーキンググループでは、105分授業実施初年度である2025年度において、センター内における105分授業実施の状況を把握・分析し、授業改善が図れるような提案を行い、2026年度の授業に活かしてもらうことを目的としたFD活動計画を立案した。年間のスケジュールは、以下の通りである。

	活動内容
4月～5月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・FDの計画立案</li> <li>・105分授業の検証方法の検討</li> </ul>
6月～7月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・GLC教員を対象に105分授業アンケートを実施</li> </ul>
9月～12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケート結果分析</li> <li>・GLC内での共有準備</li> </ul>
1月～	<ul style="list-style-type: none"> <li>・GLC内で成功事例・課題の共有</li> </ul>

	・解決策の提案
--	---------

成果は以下の2点があげられる。まず、GLCにおける105分授業に対応するための授業構成の変化を把握できたことである。それらは、①学生同士の交流活動を導入あるいは増やした、②内容を変えずに時間配分を調整した、③「内容・項目を増やした、④振り返りやまとめの時間を設けるようにしたという4点であった。

次に、その把握結果を踏まえて105分化に関する授業改善を提案した。提案されたのは、①多様なタスクを小刻みに与える、②学生の身体を動かすタスクを取り入れる、③共有しやすいツール（ホワイトボードなど）を用いてグループワークを行うという3点であった。

**(2) 評価**

教員アンケートを通じて具体的にどのように105分授業に対応したか把握し、教員間で共有できたことは有益なことである。その結果を踏まえて、いくつかの提案がなされているが、それほど目新しい内容ではないので、あと一歩踏み込んだ提案が期待される。

**3. 「国際共修 Can-Do」のためのFD**

**(1) 活動内容と成果**

2024年度のFDで、「国際共修 Can-Do リスト」が成果物として作成された。2025年度は、それを用いてFDを継続した。最終的な目標は、国際共修における「学びの可視化」が可能となるチェックリストの作成であった。以下が、スケジュールと活動内容である。

	活動内容
6月	・エクセル表にまとめられた2004年度の「国際共修 Can-Do リスト」の共有・確認 ・2025年度のFDの進め方を検討
7月	・ワーキンググループメンバーによる「多様性を知る」「共修する」という能力をターゲットにする授業コンテンツの紹介

9月	・ワーキンググループメンバーによる「多様性を知る」「共修する」という能力をターゲットにする授業コンテンツの紹介
11月	・これまで作成してきた「国際共修 Can-Do リスト」を活用しつつ、国際共修科目における「学びの可視化」をどのようにできるかを検討

成果としては、以下の2点があげられる。まず、「多様性を知る」「共修する」という能力をターゲットにする授業コンテンツをワーキンググループメンバー同士で紹介しあい共有できたことである。他者理解のためのカードゲームを使った活動、「名札作り」を通じた活動、Padletを使った「出身地を紹介しあおう」という活動など、大いに参考になる具体的な活動内容が紹介された。

次に、これまで作成してきた「国際共修 Can-Do リスト」を活用しつつ、国際共修科目における「学びの可視化」の方法を検討できたことである。話し合いの結果、国際共修の教育実践が盛んな東北大学の研究チームが開発した「国際共修ルーブリック」を参照しつつ、本学独自のチェックリストを作成する方向で考検討した。

## (2) 評価

国際共修の授業目標である「多様性を知る」「共修する」という能力をターゲットにする授業コンテンツの共有を継続的に行うことにより、教育活動の充実が期待できる。今後、授業コンテンツ集のようなものを作り、教員間で共有するのによいと思われる。「国際共修 Can-Do リスト」を活用した「学びの可視化」は、現実的かつ可能な方法である。東北大学研究チームのルーブリックを参考にして、より充実したチェックリストの作成が可能となる。